

北庄のルーツ「一乗谷」

歴史的に関係が深い北庄と一乗谷。朝倉氏一族には、北庄を本拠地としていた家(朝倉頼景から5代景種まで)がありました。

朝倉氏の北庄城は、後に越前国を治める柴田勝家の北庄城の前身となり、また、一乗谷から移された多くの寺院、医師や商人、職人などが、その後の城下町繁栄の基礎となりました。

こうしたことから、北庄のルーツは、一乗谷であるともいえるのです。

北庄城と一乗谷城

戦国時代は、全国各地に要害堅固な「山城(詰城)」が多く築かれました。日常生活の場としては、平地に建てられた「館」があり、特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡では、一乗谷川に沿った狭い土地に、朝倉氏の館、その周囲に家来の屋敷や寺院、さらに職人や商人たちの町屋が計画的に立ち並んでいた跡がみられます。

朝倉氏は、東に詰城の一乗谷城、西に東郷槇山城、北に成願寺城、南に三峯城といった出城を建て、当時、日本最大級といわれた城下町を厳重に守っていました。

特に、標高473mの一乗城山に築城された一乗谷城は、防御に優れた要塞、言わば「不落の城」でした。現在でも尾根や谷筋に沿って、空堀、掘切、堅堀、土塁や伏兵穴跡が生々しく残っています。その配置は山頂の本丸(千畳敷)に近づくにつれ巧妙となり、大きな掘切や織田信長の侵攻に備えて築かれたという約140条の畝状堅堀などが複雑に配されています。(下図「一乗谷城模式図」参照)



「北庄城」
イラスト：香川元太郎

最後の当主義景は、1573年の刀根

坂の戦いの後、大野へ逃れますが、一乗谷にとどまりこれらの山城を使用していたなら、歴史は変わっていたかもしれません。

しかし、信長に攻められ朝倉氏は滅亡。堅固な一乗谷城は一度も戦に使用されることなく、灰燼に帰したのです。

安土桃山時代になると、山城は政治的支配の拠点としては不向きだったことや、戦闘方法の進化などにより数が減少。朝倉氏の後、越前を治めた柴田勝家築城の「北庄城」のように、平地に建てる平城が主流となります。

一乗谷城模式図



北庄城は、一説には信長の安土城に匹敵する巨城で、その町の規模も安土の2倍ほどあったといわれています。また、朝倉氏の一乗谷城本丸の鬼石(棟石)のほか石仏や石塔など様々な加工品として使用されていた「笏谷石」を屋根の石瓦に使用。北庄城は大変美しい城であったと宣教師ルイス・フロイスが書き残しています。

新たに越前国の中心地となった「北庄」とそのルーツ「一乗谷」。

現在の福井市の中心部とその周辺には、

北庄城跡(柴田神社)のほか、朝倉氏の菩提寺である心月寺(初代孝景、義景画像を所蔵)や足利義昭が一乗谷を訪れた際、御殿を建てた安養寺、3代貞景が家臣の上田兵衛尉に命じて一乗谷に創建させた寺院を後に柴田勝家が北庄に移設して自らの菩提寺にしたといわれる西光寺などの「朝倉氏ゆかりの地」があります。

特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡や福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館とともに足を運んでみてはいかがでしょうか。